慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オランダ領東インドにおける日本人売薬商の研究
Sub Title	
Author	Meta Sekar Puji, Astuti
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2012
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.74 (2012.) ,p.112- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成23年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000074-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2) 押川文子1981「独立後インドの指定カースト・指定部族祭作の展開」『アジア経済』22号1巻，26–45頁。
3) 1961年センサスでは，STの割合は，88.67%であった。この減少は他州からの移住者が増えていることを示している。
4)「ブータン東部におけるツーリズム導入に関する一考察：メラとサクテンの事例から」『人間と社会の探求　慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』70号，31–53頁，2010年。
5) その政府の思惑通り，オープン前の2009年には16人だったサクテン，メラへのツーリストは，2010年には，128人，2011年には143人と増え，空港も完成したので，今後も増加が予想されている。オープン前には，特別許可を得た少数の外国人が政府の客として入域することができた。筆者も2006年から3年連続で訪れている。
6) Community Based Tourismとは，ツーリストを迎える側のコミュニィが中心となり，コミュニティの利益を守り促進するためにツーリズムを開発の手段として用いることと解釈される。

オランダ領東インドにおける日本人売薬商の研究

アストゥティ・メタ・スカルプ

研究のねらい

本研究は，オランダ領東インド時代の日本人社会の歴史の中で，1900年代ならびに1910年代，つまり初期のころの商業移民の活動に焦点をあて，彼らの実態を分析し，日本，インドネシア，オランダの三者の関係における歴史的な意味を探ろうとするものである。

戦前期の日本人の 中で，日本人の商売の形態は，行商と固定商店の2つのタイプがあったことが特徴的であると指摘している［Post 1991：167］。本研究はそのうち行商人に注目する。行商人はマッチ，櫛，糸，陶器，薬など日常の生活用品を大きな行李に入れ，それを現地で雇った現地住民たちに天秤棒で担がせ，街から街へ，村から村へと売り歩いた。筆者は，彼らが売り歩いた商品の中で，もっとも重要な意味を持ったものとして，仁丹や目薬などの庶民向けの薬に注目した。

1900年代から1910年代の日本人売薬商に焦点を当てるのは，この時代に取り扱われていた多数の日本商品の中で，仁丹などの薬が占めていた割合が非常に多いということに加え，彼らがオランダ領東インドにおける日本人コミュニティーの基礎を築き，インドネシア「原住民」社会との密接な接点を持つ上で重要な意味を持ったと思われるからである。

研究内容

1900年代から1910年代の日本人売薬商に焦点を当てるのは，この時代に取り扱われていた多数の日本商品の中で，仁丹などの薬が占めていた割合が非常に多いということに加え，彼らがオランダ領東インドにおける日本人コミュニティーの基礎を築き，インドネシア「原住民」社会との密接な接点を持つ上で重要な意味を持ったと思われるからである]。

それまでの「からゆきさん」や，博打うちや女衒(ぜげん)[1]などとは違って，この人たちは，いわゆるまっとうな職業に従事する最初の日本人移民グループであって，当地の日本人コミュニティーを形成する役割を果たした。すなわちこの時期の売薬商の商業活動は，これ以後の時期，「トコ・ジュパン（Toko Jepang)」(文字どおりの意味は「日本の店」)と呼ばれてインドネシアの原住民から愛着をもって受け入

れられるようになった日本人商人たちの小規模な商業活動や，日本人居留民のライフスタイルの原型になったのではないかと考えられるのである。本研究で論じる小川利八郎，堤林数衛，大友信太郎など，日本人社会の重要人物とみなされる商人の多くは，この1900年代から1910年代に渡航している。

本稿は以上のような先行研究の積み重ねの上に立ち，前述のような問題関心のもとに進められている研究の一部であるが，その構成は以下のような3章から成る。

第1章は，研究の背景として，「からゆきさん」以来のオランダ領東インドへの日本人の進出の歴史を概観する。

次いで第2章において，その日本人の発展の歴史の中で，1910年代に焦点をあて，特に売薬商の重要性に着目し分析する。その中で，「からゆきさん」の存在が，日本の民間薬の進出をもたらす上で重要な意味を持ったことを指摘し，彼らの活動の詳細を分析する。また，薬品のオランダ領東インドへの輸出の経緯とその影響をも分析する。これは日本の薬が，当時劣悪な医療環境下にあったインドネシアの現地住民たちに与えた影響が大きかったと考えられるからである。薬の販売に際して当時の現地の新聞・雑誌に掲載された広告や看板の文言を通じて，オランダ領東インドで最も多く販売されていた2つの日本の薬，すなわち仁丹と目薬(点眼薬) について，その現地社会への浸透度を推測する。

次いで第3章では，彼らの活動に対するオランダ政庁の反応を分析し，オランダ当局は売薬商たちが純粋に商業活動をしていただけでなく，スパイ活動に関係しているのではないかと言う危惧を抱いていたとことを指摘する。1913年9月10日に対日・対中国商業問題顧問（Adviseur voor Japansche en Chineessche Zaken）のヴェットゥム（Wettum）が，オランダ領東インド総督A. W. Fイーデンブルフ(Idenburg)に，送った書簡，それに対して政庁官房長官（1sten Goveurnements secretaris）のモレスコ（Moresco）が，各地の地方政府に送った回状，またそれに応えて28の地方政府から政庁宛てに送られた報告書を分析すると，オランダ植民地当局は日本人に対する危惧を抱き，日本人商人たちの南方への進出に関する風評や実態に関心を強め，真剣に監視するようになっていたことがわかる。

1920年代中頃，オランダ領東インドの貿易額の中で日本からの輸入がオランダからのそれを越えて第1位になった。さらに日本が中国大陸への侵略を開始した1930年代以降，オランダ政府が日本に対する警戒心を非常に強めるようになったということは，ほぼ通説になっている。しかし，1913年から1914年は，日本からオランダ領東インドへの貿易量が急増する前の時期であった上，少なくとも政治的には日本はオランダにとって友好国であった。故に，このように早い段階で既に，オランダが日本人に対し，警戒心を強めていたということは注目に値する。本稿ではオランダの危惧が取り越し苦労だったのか，それとも日本人商人たちが何らかの国策的な活動を担っていたのかを検証するとともに，後年一般的になった「日本人商人スパイ説」が既にこの時期から芽生えていたことを立証する。

依拠した資料

本研究が依拠する資料は，当時インドネシアで刊行されていた新聞・雑誌，日本人の移民たちが書き記した手記，そしてオランダ植民地当局の公文書，ジャワ銀行の資料等である。

新聞は，オランダ領東インドで当時刊行されていた日本語新聞の「東印度日報」と「爪哇日報」を用いた。日本人移民たち自身が残した資料としては，56人の関係者の手記を集めた［武田（編）1978］

や，写真集［ジャガタラ友の会（編）1987］を使用した。1968年に刊行され，のちに1978年に改訂された『ジャガタラ閑話―蘭印時代邦人の足跡―』も使用した。

オランダ政庁の資料は，ハーグのオランダ国立文書館（Algemeen Rijksarchief）ならびにジャカルタのインドネシア国立文書館（Arsip Nasional Republik Indonesia）に多く所蔵されている。本研究で主として利用したのは，各州の理事官や県の監督官などオランダ人地方行政官が交代するときに総督あてに提出した申し送り書（Memori van Overgave）や，日常的な報告や何らかの事象に直面した場合に送る郵便報告書（mailrapporten）の2種類，並びにそれに基づいて政庁側から各地方の行政官にあて発信された書簡類である。それらのいずれにおいても，当時の社会状況が詳細かつリアルに報告されている。とりわけオランダ植民地政庁が1913年から1914年にかけて日本人商人たちの活動を監視する中でまとめた各種の極秘の報告書は，非常に重要な情報を提供してくれた。

さらに，当時の中央銀行であったジャワ銀行の資料も活用した。これは現在のインドネシア銀行本店（首都，ジャカルタ）に所蔵されていることが1982年に明らかになったもので，公開されているが，まだ余り多くの研究者が活用していない。1828年から1953年までのデータがあり，主として国家ならびに各州の財政に関するものが多いが，本研究で利用したのは，中央銀行本店と各地の支店との間で交わされた顧客に関する情報である。この中に何人かの日本人顧客の名前が見出される。この資料は膨大であり，筆者はまだその全貌にアクセスできていないため，本稿が主として扱う時期に直接関係のあるものはまだ見つからないが，「オランダ領東インドにおける日本の経済進出の証拠（Stukken Inzake de Economische Penetratie van Japan in Nederlands-Indie）」と題する文書が，1922年以降の日本人の経済活動について詳細な情報を伝えている。とりわけ地域別の日本人居留民の人口（1930年統計）や，日本関連の輸出入量，日本に対して課された輸出割当量などについて詳細な情報を載せている。この文書は，日本人に対して明らかにスパイのレッテルを貼るようになった1930年代のオランダ政庁の見解をよく反映している。

終わりに

本研究の目的は，1900年代から1910年代にかけてのオランダ領東インドにおける日本人商人，中でもとりわけ存在が目立った売薬商の活動に焦点をあて，その特徴を描き出すとともに，オランダ当局が，植民地の経済と政治を脅かす存在として，かなり早い時期から彼らの活動に対して警戒の目を向けていたことを指摘することであった。

この地に進出した最初の日本人は，「からゆきさん」と呼ばれる娼婦たちであった。その後，彼女たちの間に蔓延していた性病を治療するという名目で，日本からの初期の商業移民たちが薬を持ち込み，小規模に販売し始めたことが，その後の日本の薬品の大規模な進出へとつながり，日本人商人の中でも売薬商が目立つようになった。これらの売薬商は，行商と言う形で各地を歩き回り，現地住民との間に様々な接点を持ったため，オランダ政庁はその動きに対して警戒心を抱くようになった。

同政庁は1913年に，官房長官を通じて秘密裏に，各地の地方行政官あてに回状を発送し，日本人売薬商の活動を制限し，監視することを命じた。官房長官の命令に対して1913年10月から1914年5月にかけて28の地方の行政官から文書で報告が送られた。それらには，日本人商人と「からゆきさん」との関係，日本人商人の現地住民に対する振る舞いや現地住民との交流などが記されている。オランダ人が抱いた不安や恐れは，おそらく日本が，オランダ領東インドにおいて経済を浸透させることに成功し

た初めてのアジアの国であるということ[Booth, 1994: 45]に起因するであろう。またそのほかにも，日本人の文化や，現地住民との交流方法が欧米のそれとは大きく異なっており，行動が予測できないこともまた，オランダ人たちの不安を助長させる原因となった。

それゆえ日本人商人に対する逮捕事件が起こったり，時には，日本人商人は日本のスパイだというような噂が飛び交ったりした。しかしながら，政治的プロパガンダ行為が発見されることはなかった。各地からの報告書には地域差があるものの，一般的に，中央の政庁が抱いていたような危惧を確認するような内容のものは少なかったのである。すべては政庁の過剰反応であった。そもそも日本人売薬商たちのジャワ語やムラユ語の言語力は満足のいくレベルではなく，現地住民たちと十分なコミュニケーションを図ることすら難しかったことから，華僑を通訳として同伴する行商人もいた。この時期の日本人商人たちをスパイとしてみなすには，根拠が不十分であると言える。

しかし1913年から1914年にオランダ政庁が抱いていた危惧は，その後1920年代や1930年代には現実のものとして大きく膨らんでいくことになる。1920年代になるとオランダは，第1次世界大戦を経て大幅に拡大した日本の対オランダ領東インド貿易量に危惧を抱き始め，1930年代になって日本が満州や中国各地へ侵略するようになると，これは政治的な危惧へと変わっていった。こうして，日本人はほぼ全てが諜報員であったのかのようなイメージが広く共有されていくようになる。その伏線として，1900年代から1910年代の日本人売薬商の活動と，それに対するオランダ植民地関係者の様々な反応は非常に重要なものであると思われるのである。

注

1) 主に若い女性を買い受け，娼館・遊郭などで男性に性的サービスを提供する仕事を強要する人身売買の仲介者を指す。「からゆきさん」たちの海外渡航には，斡旋業者として，彼ら女衒が介在していた。

参考文献

著作・論文（日本語）

後藤乾一（1986）.『昭和期日本とインドネシア―1930年代「南進」の論理・「日本」の系譜』勁草書房.

後藤乾一（編）（1987）『わが青春のバタビア若き調査マンの戦前期インドネシア留学日記』.

後藤乾一（1989）『近代日本とインドネシア　―「交流」百年史―』北樹出版.

後藤乾一（1994）「近代日本・東南アジア関係史論序説」『ナショナリズムと国民国家』（講座現代アジア1）東京大学出版会.

後藤乾一（2010）『近代日本と東南アジア』岩波書店

橋重孝（2002）オランダ領東における日本人の経済活動について―1910–20年代の東ジャワを事例として―『金城学院大学論集』人文科学編　第35号，111–152.

橋重孝（2003）「オランダ領東インドにおける日本人会と日本人学校　(1) ―昭和初期，ジャワ社会を事例として」『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』第7号，1–14.

石居太楼（1978）「『半世紀の歩み』の特質(近代日本の南方関与)」『東南アジア研究』16(1): 119–135.

ジャガタラ友の会（編）（1987）『写真で綴る蘭印生活半世紀：戦前期インドネシアの日本人社会』ジャガタラ友の会.

倉沢愛子（1992）『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社.

倉沢愛子（1992）「インドネシア」『近現代史の中の日本と東南アジア』東京書籍

森崎和江（1976）『からゆきさん』朝日新聞社.

清水元（編）（1985）『両大戦間期日本・東南アジア関係の諸相』アジア経済研究所.

白石隆（編）（1980）『オランダ旧植民地省文書館における日本および日本人関係文書目録特定研究』東京大学教養学部国際関係論研究室.

杉山伸也（1985）「日本綿品のアジア市場進出とイギリス資本の反応（1890 ～ 1940年）—マンチェスター商業会議所資料を中心として」清水元(編)『両大戦間期日本・東南アジア関係の諸相』47–78.
武田重三郎（編）（1978）『ジャガタラ閑話：蘭印時代邦人の足跡』ジャガタラ友の会.
山本竹敏（1995）『広告の社会史』法政大学出版局.
矢野暢（2009）『南進の系譜—日本の南洋史観—』千倉書房（初版は1975年中央公論社刊）.
矢野暢（1977）「堤林数衛の精神的『回心』:『南方関与』の近代的類型」『東南アジア研究』15(3): 307–333.
矢野暢（1978）「大正期『南進論』の特質(近代日本の南方関与)」『東南アジア研究』16(1): 5–31.

著作・論文（日本語以外）

Astuti, Meta Sekar Puji (2009). *Apakah mereka mata-mata?: Orang-orang Jepang Indonesia 1868–1942*. Yogyakarta: Penerbit Ombak.
Boomgaard, Peter (2007). Syphilis, Gonorrhoea, Leprosy and Yaws in Indonesian Archipelago, 1500–1950, in *Manusya: Journal of Humanities*, Special Issues No. 14. 2007: 21–41
Booth, Anne (1994). Japanese Import Penetration and Dutch Response: Some Aspects of Economic Policy Making in Colonial Indonesia in *International Commercial Rivalry in Southeast Asia in the Interwar Period*. New Haven: Yale Southeast Asia Studies, 133–164
Cochran, Sherman (2006). *Chinese medicine men: consumer culture in china and southeast Asia*. Cambridge: Harvard University Press.
De Jong, P. de Josselin & Jordaan R. (1985) Sickness as a Metaphor in Indonesian Polithical Myths. in: *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 141 no: 2/3, Leiden, 253–274.
Dick, Howard (1989). Japan's Economic Expansion in the Netherlands Indies Between the First and Second World Wars, *Journal of Southeast Asian Studies* September, Vol. XX No. 2. Singapore: NUS , 244–272.
Dijk, Cornelis Dijk, Kees van, (2007). The Netherlands Indies and the Great War 1914–1918. Leiden: KITLV Pers.
Goto, Ken' ichi (1997) '*Returning to Asia*': *Japan-Indonesia Relations 1930–1942*. Tokyo: Ryukei Shyosha.
Mook, H. J. Van (1942). Tien Jaar Japansch Gewroet in Nederland Indisch. Batavia: Report of the Netherlands East Indies Government.
Murayama, Yoshitada (1993). The Pattern of Japanese Economic Penetration of the Prewar Netherlands East Indies in *The Japanese in colonial Southeast Asia*. Ithaca. Cornel University: 89–111.
Nawiyanto (2010). Mata Hari Terbit dan Tirai Bambu: persaingan dagang Jepang-Cina di Jawa masa krisis 1930-an dan 1990-an. Yogyakarta: Penerbit Ombak.
Post, Peter (1991). *Japanse Bedrijvigheid in Indonesia 1868–1942: Structule Elementen van Japan's Economisch Expansie in Zuidoost Azie*. Unpublished PhD Thesis. Amsterdam: Vreij Universiteit Amsterdam.
Post, Peter (1993). Japan and the Integration of The Netherlands East Indies Into The World Economy, 1868–1942. Review of Indonesia and Malaysia Affairs, Winter no 27: 134–165.
Post, Peter (1996). The Characteristics of Japanese Entrepreneurship in the Pre-War Indonesia Economy in Lindlbad (ed.) *Historical foundation of a nation economy in Indonesia 1890s–1990*. Amsterdam North Holland: KNAW, 297–314.
Post, Peter (1996). The Formation of the Pribumi Business Elite in Indonesia, 1930s–1940s In: *Bijdragen tot de taal-, land- en volkenkunde, Japan, Indonesia and the War Myths and realities*, 152. Leiden: 609–632
Shimizu, Hiroshi (1991). Evolution of Japanese Commercial Community in the Netherlands Indies the Pre-War Period (From Karayuki-san to Sogo Shosha) in *Japan Forum*, 3: 1, 37–56.
Shimizu, Hajime (1980). *Southeast Asia in modern Japanese Thought: the development and transformation of "Nanshin-ron"*. Brisbane: Department of Pacific and Southeast Asian History School of Pacific Studies ANU.
Shiraishi, Takashi and Shiraishi, Saya (1993). *The Japanese in Colonial Southeast Asia*. Ithaca: Cornel University.
Sugiyama, Shinya & Guerrero, C. Milagros (ed) (1994). International Commercial Rivalry in Southeast Asia in the Interwar Period. New Haven: Yale Southeast Asia Studies.
Sugiyama, Shinya (1994). The Expansion of Japan's Cotton Textile Exports intoSoutheast Asia in International

Commercial Rivalry in Southeast Asia in the Interwar Period. New Haven: Yale Southeast Asia Studies, 40–73.
The Tohindonippo Sha (1939). *The Directory of Japanese Netherlans-Indies Commerce*. Batavia.
Warren, Francis J. (1993). *Ah Ku and Karayuki-san: Prostitution in Singapore 1870–1940*. Singapore: Oxford University Press.

文書館史料

Inventaris Arsip De Javasche Bank（旧ジャワ中央銀行公文書,（1985）Stukken Inzake de Economische Penetratie van Japan in Nederland–Indie（オランダ領東インドにおける日本の経済進出の証拠）1922–1951. Inventory number: 2959–2964.
National Archive of the Netherlands, The Hague, Ministerie van Koloniën: Geheim Archief (Ministry of Colonial: Secret Archives), 1901–1940, access number 2.10.36.51, inventory number 133, 161, 166, 187.
National Archive of the Netherlands, The Hague, Algemene Secretarie van de Nederlands-Indische Regering en de daarbij gedeponeerde Archieven (Registered Archives of Secretary General of Netherlands Indies Government), 1942–1950, access number 2.10.14, inventory number 5312
外務省外交史料館　本邦移民関係雑件南洋ノ部J 1.2.0.J2-9

インド・カルカッタの都市祭礼をめぐる文化人類学的な研究

澁　谷　俊　樹

本調査報告は，2011年度のカルカッタの都市祭礼とそれを運営する町内会に関するものである。当該年度は特に火葬場で行われるカーリー女神祭祀について調査を実施した。この祭礼の運営母体はその他の運営母体と同様に共同出資型に変化しているが，現在でも，「薪の遺体焼き場の上で祭礼を行う」，「火葬場で働くドム・カーストが祭礼を補助する」など，タントリズムの観念として説明される様々な掟や秘密がある。

18世紀以降ヒンドゥー王権や領主の家庭で始められたとされる今日の女神の祭礼は，植民地期の土地制度改革に伴う王権や領主の衰退を背景に共同出資型に転じ，20世紀初頭の反英独立運動を経て都市の町内会を主体とする祭礼として大衆化した。旧在地領主の中には今日も中庭で祭礼を行うものがあるが，大部分を占めるのは共同出資型の町内会である。粘土製の神像を各家庭や町内会が建立した仮設寺院に招き，司祭を呼んで数日間祀り，ガンジスへと流す祭礼で，祭礼後には寺院も解体される。祭礼を行う町内会はカルカッタだけで5千件を超える。

◆　祭礼を運営する町内会と「路縁」

カルカッタもグローバル化の影響を最も強く受ける大都市の一つであるが，小商店や露店など地域経済と関わる町内会が無数に存在する点で，東京のような都市と構成が異なる。こうした町内会に外部から来た研究者がいかにアクセスできるか？という方法論的問題を考える時，路上に展開するもう一つの決定的な差異が改めて着目される。本調査は，カルカッタの知人宅に下宿し知人関係も頼りに行われた。しかし下宿先の人間関係にも限度がある。本報告では，都市の社会構成を理解する上で，町内会のような地縁とも関わる重要な人間関係を捉える概念として「路縁（ろえん）」を提唱する。